＜北海道熊研究会報＞　第40号　2014年　12月 9日

ご意見ご連絡は下記へどうぞ
北海道熊研究会事務局　北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)
代表　門崎　允昭　e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp
事務局長　Peter Nichols ピーターニコルス氏
幹事長　藤田　弘志　氏
北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association
Website は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

「北海道熊研究会報」読者の皆様へお知らせ

2014年8月18日から連日13回にわたり、北海道新聞の夕刊紙面の、「私のなかの歴史」で、「ヒグマ研究４５年」と言う題で、私(門崎允昭)が、私の「ヒグマについての考え、人と熊の共存策」等を口述、編集委員の「中尾　吉清」さんが取材文章化し、掲載されました。その第8回目、8月26日(火曜日)掲載を、ここに再録しますので、ぜひ、お読み下さい。

3　6版　2014年(平成26年)8月26日

私のなかの歴史

ヒグマ研究45年 ⑧

札幌市内で2011年から住宅、市街地でクマの出没が相次ぎ、マスコミで大騒動になりました。理由と対策を2回に分けて考えてみましょう。

札幌の円山、藻岩山などの西側は100～1500㍍弱の山が連なる幅36～40㌔の樹林帯です。1970年代末まで、銭函川上流域―手稲山―砥石山―島松山を結んだ線の西側がクマの生息地でした。

私は64年以降、半世紀間のこれら生息地におけるクマの捕殺に関するデータを持っています。72年から39年間は、捕獲された現場に

動物学者
門崎(かどさき)　允昭(まさあき)さん

7カ月齢の子グマ。5カ月齢に比べ手脚が長くなり大人びてくる

札幌で大騒動

若い個体が探索しただけ

赴くなど生息環境を自ら調査しました。他の期間は、札幌市の資料を入手しています。

この生息地で4、5月に穴ごもりのクマの猟が行われていました。高価だった熊の胆（たんのう）（胆嚢）が目当て。子グマは生かして連れ帰りました。85年にこの猟が行われなくなってから、徐々に東側に行動圏が広がってきたのです。

94年に里山、公園などで時々、出没が確認され99、00年の2年間はともに5件出没。01年以降は10件を超えるようになりました。いきなり増えたのではなく、徐々にです。

どんなクマが、なんのために出没しているのか。野生動物の行動には理由・目的があります。それを正確に把握することが人的、経済的な被害を防ぐ第一歩です。

多いのは親離れしたばかりの若グマ。子グマが1頭だけの場合は1歳で、2頭以上の場合は2歳で親離れします。その時期は5～8月で、「子グマ」から「若グマ」と呼ばれるようになります。

若グマは、自分の生活圏を確立するため森林を探索、徘徊（はいかい）します。林の端に人家があったら…母グマといる時は、近づくことは禁じられた行為でした。独り立ちした今、そこがどういう場所か好奇心を起こし、近寄って自分のすみかに利用できるか確認します。

このように若グマが自分の生活圏を探すのは野生のおきて、体験しなければならない行動です。

これに対して「道に迷った」とか「人を恐れない新世代グマ」などという論評がありますが、見当外れだと思います。

若くても野生動物が道に迷うことなどあり得ません。突然、通り道に巨大な構造物を造られた、などの場合は別ですが。

若グマたちは日没から夜間、朝方にかけて本能的に人を避けるように行動しています。昔からの普通のクマの、当たり前の行動です。これのどこが「人を恐れぬ新世代」なのでしょう？

本当に人を恐れないなら、昼日中でも姿を見せるし、同じ個体が毎月、毎年ずっと繰り返して人前に現れるはずですね。しかしながら、これまで一番長く市街地に滞在した個体でも数日間です。

あの若グマは納得いくまで探索して、「ここは自分がすむ場所ではない」と悟り、立ち去ったのです。あのクマが再び市街地に戻って来ることはないでしょう。

私の45年間の調査では、2歳未満（体長1・3メートル以下、足幅13センチ以下）の若グマが人を襲った例は一度もありません。

（聞き手・中尾吉清）

＜熊の生息数＞

私の熊に対する対応は、熊による人身事故と経済的被害が、予防し得れば、何頭居ても良いではないかと言うのが持論。熊村に属する研究者は(原子力御用学者集団を揶揄した“原子力村”と同類)、熊を管理するためには、生息数調査の予算を新年度も付けるべきと発言(知床大学誘致の公開会合で酪農大学の助教授？(熊に詳しい)が発言（道新の記事)。過去に幾度も生息数調査をしているが、それは、猟師から聞いた数を集計した程度のもの。全く、税金の無駄遣いである。